



TITLE:

現代哲学におけるロゴスの問題(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

宮原, 勇

CITATION:

宮原, 勇. 現代哲学におけるロゴスの問題. 京都大学, 1997, 博士(文学)

ISSUE DATE:

1997-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202259>

RIGHT:

氏 名	みや はら いさむ 宮 原 勇
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 328 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	現代哲学におけるロゴスの問題

論文調査委員	(主 査) 教 授 伊 藤 邦 武	教 授 藺 田 坦	教 授 内 山 勝 利
--------	----------------------	-----------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代哲学の大きな特徴である「言語論的展開」ということが、人間の理性、すなわちロゴスにかんするいかなる哲学的理解をもたしているか、という問題を検討し、その検討をつうじていくつかの現代哲学の代表的な理論に批判的解釈を加えるとともに、言語哲学的展開以後の哲学が目指すべきロゴス論の基本的な性格を特定しようとする研究である。このような本論文の研究課題は、言語論的展開が一種の相対主義的なロゴス観に傾斜する傾向があることに、その問題意識の源泉をもっている。論者はこの傾向に抗して、「ロゴスの復権」を目指そうとするのであるが、そのためにまず、ロゴスの働きそのものを、「世界経験」と「他者との交わり」という二つの局面において捉える必要を確認し、さらにこれら二局面を包括的にとらえるための言語現象を、「人間の相互行為としての言語コミュニケーション」として理解するべきであることを主張する。その上で、このコミュニケーションという現象にかんして分析されるべき三相が、現在—未来—過去という人間存在の時間的本性に対応する、「志向性」「倫理性」「文化社会的歴史性」の三つに分類されることを指摘し、それぞれにたいしては現象学的、超越論的、解釈学的分析によるコミュニケーション論というものを想定できると論じる。

本論文は、これら三つの分野にかんする現代の言語哲学諸理論の批判的解釈と、その限界の克服の試みであるが、その具体的な解釈は、とくに現代ドイツの哲学理論に焦点を定めてなされている。すなわち、第一章と第二章では、ハーバーマスとアーベルのいわゆる「言語遂行論」の批判的検討をつうじて、これにかわるべき「言語コミュニケーションの現象学」の構想が模索される。第三章と第四章では、おなじくハーバーマスとアーベルのディスクール倫理学が批判的に分析されるとともに、その理論的源泉たるカントの倫理学における「根本悪」の概念の限界が指摘され、これにかわるべきものとして、パトスと相即的なロゴスがもつべき自己批判的契機を基礎においた道徳的理性の理論化が要請される。そして、最後の第五章では、ガダマーの解釈学を検討し、新たに「普遍性を志向するディアロゴスの運動」としてのロゴスの役割を復活させるような理論の可能性が模索される。本論文は以上のように、現代ドイツ哲学との批判的対話をつうじて、言語コミュニケーションの三つの相に対応する、包括的なロゴス論の可能性を素描し

ようとする試みである。

まず、第一章「ハーバーマスの言語遂行論の批判的検討」では、ハーバーマスの「普遍的言語遂行論」とアーペルの「超越論的遂行論」とが取り上げられ、これらの共通点と相違点とが整理されたうえで、それらに共通の問題点が指摘される。論者によれば、これらの理論は、前者がコミュニケーション論の社会批判的性格を強調するのにたいして、後者が認識の基礎付けの問題に定位するという点で、完全には同一の理論とはいえないにしても、それらがいずれも、意味の三要素（指示、意図、規約）をコミュニケーションの観点から分析し、そのコミュニケーションにおける「理想的発話状況」の反事実的な先取りを前提している点で共通している。しかしいずれも、こうした意味作用や先取りが成立するために要請されねばならない言語遂行の主体における意識の志向性が無視されている、という限界をもつとされる。ついで、第二章「言語コミュニケーションの現象学」では、言語コミュニケーションにおける志向性の必要が、知覚経験の言語化、その発話、その聴取の各レベルにかんして確認されるとともに、これらの志向作用のもっとも重要なものとして、言語表現の「意味の理念的同一性」の与料的設定という事態が取り上げられる。論者は、この意味の同一性の確保が、ハーバーマスやアーペルにおいては、討議や対話をつうじた最終目標として位置づけされている点に、これらの理論の矛盾が存在する、と指摘するとともに、他方、フッサールの『論理学研究』では、これが超時間的なイデア的同一性として独断的に前提されていることを批判する。そして、フッサールがその後期の『幾何学の起源』において萌芽的に示したように、この同一性を、コミュニケーションの都度つねに反復的に獲得されるような、「全時間的な同一性」として解釈しなおすことによって、それが統制的な理念であるという性格と、相互主観的な妥当性を要求するものであるという性格を、併せて確保できると論じる。論者の構想する言語コミュニケーションの現象学とは、このような、解釈行為の遂行主体における、意味の「反復的現前による自己同一性」の確保ということをも分析の基盤とする現象学である。

次に、第三章「ハーバーマスとアーペルのディスクール倫理学」では、これら二人の倫理学説が批判される。これは、前章での現象学がその根本において、コミュニケーションの主体どうしが、「互いに等根源的な自由の主体として承認」しあうことを要請している点をうけて、この問題を、同じくコミュニケーションにおける相互承認を原理とするこれらの理論との対比のもとで、より明確化するためになされる批判である。論者の考えでは、ハーバーマスやアーペルにおいては、我々の相互承認に裏打ちされた行為規範が、ディスクール（対話、討議）の形式的諸原理からのみ導きだされるか、あるいは、生活世界という局所的な背景知と形式的原理とから導き出されるかのごとく論じられているが、これらは、前者が認知主義的である点で、後者が普遍主義と相対主義を併存させている点で十分とはいえない。むしろ、行為規範の普遍的妥当性は、「真の自己存在」への「尊敬」という感情（パトス）と結び付いた、公共性の本来的形態への転換という契機を基礎としてもたねばならない、とされる。そして、第四章「道徳的理性の基礎」は、このような感情をその倫理学の根本においた、カントの倫理学説についての批判的超克の試みである。論者はここで、カントの倫理学が表面的には、人格の相互尊重というテーゼを掲げながらも、その実質的な議論においては独我論的で自己賛美的な「理性の高慢」に陥っていると指摘し、このことが、その『宗教論』における、いわゆる「根本悪」の理論においても、一方で「道徳的完全性をそなえた英知的

存在者」の理念がアприオリに要請されつつ、根本悪の根拠は理性の限界内にとどまる観点からは究明できない、という不徹底さと結びついていると論じる。これにたいして、論者の考えでは、道德性の基礎には、何らの宗教的観点を伴った、理性自らの根源的有限性にたいする自己否定的反省というものが置かれなければならない、とされる。

最後に、第五章「コミュニケーションの動的構造としての自己理解と他者理解の弁証法」では、ディルタイおよびガダマーの解釈学を取り上げて、理性あるいはロゴスによる、他者の言語行為の理解、とくに時代や文化的背景を異にする他者との相互理解の問題を分析する。論者はガダマーの「地平融合」の概念が、同等な二つの地平の融合として理解されるかぎり、それは彼が強調する「解釈行為の立脚点の被拘束性」というテーゼに矛盾をきたすばかりではなく、事柄それ自体としても不可能な、矛盾した事態を表すことになる、と考える。しかし、この概念を、解釈主体の側のパースペクティブと解釈の対象のバックグラウンドという別々なものの融合と捉えれば、解釈行為の動的で弁証法的な性格を的確に表現したものといえる、と主張する。そして、ガダマーが強調したもう一つの点、すなわち「言語の世界開示性」ということをこの概念に結びつけることによって、ロゴスのもつ普遍性への志向という本性を表現することができるようになる、と論じる。論者の考えでは、解釈学におけるこのようなディアロゴスとしてのロゴス論が、第二章で展開された、言語コミュニケーションの現象学における、言語表現の意味の理念的同一性の根拠づけをめぐる理論と、相互に補う関係にあると見なされる。すなわち、「自由な主体としての相互承認」を基礎においた「意味の理念的同一性」の志向と、「言語の世界開示性」にもとづく「地平融合」をつうじた解釈の創造的生産とは、同じロゴスの働きの、いわば水平的作用と垂直的作用として、相互に支えあっているとされるのである。

論文審査の結果の要旨

現代哲学の大きな特徴は、いわゆる「言語論的展開」という契機を経て、人間の思惟の諸相の批判を言語活動の分析をつうじて行おうとするところにある。本論文はこのような現代哲学の言語論化が、人間の理性、すなわちロゴスについての相対主義に傾く傾向があることを批判し、普遍性を要求しうるロゴス像を言語論的に確立しようとする試みである。そのために論者は、現代ドイツ哲学における主要な言語論哲学を包括的に扱い、それぞれにたいする批判と、再解釈とをつうじて、新たな総合的視点にたった言語論を提唱しようとする。具体的にその解釈の対象となるのは、ハーバーマスとアーベルの言語遂行論ならびにその倫理学、フッサールの現象学、ガダマーの解釈学という、三つの思潮である。論者は、言語遂行論の超越論的基礎として、間主観的に変換された現象学を補い、またハーバーマスらの「討議倫理学」の基礎に、自己否定的契機をもったパトスと結びついたロゴス理解を置くことによって、「言語的コミュニケーション」についてのより十全な理論が構成しうると主張する。そして、ガダマーの解釈学を、異他的なものに対する普遍性を志向したディアロゴス的な解釈作業の理論として理解することによって、この解釈学と言語的コミュニケーション論の接点が生まれると論じる。本論文が模索するのは、このような現代ドイツ言語論についての詳細な分析をつうじた、新たな総合的言語哲学の可能性である。

このように、本論文は包括的かつ意欲的なものであるが、そうした主題に要求されるであろう周到な議

論を備えている。以下、本論文の特徴と独創性を列挙すると、次のようにまとめられる。

(一) 人間理性すなわちロゴスについての分析の射程を、理論理性と実践理性の双方にまたがる、総合的なものとして捉えていること。

(二) 現象学、解釈学、言語遂行論という、現代ドイツ哲学の代表的な理論を扱う際に、これらを単純に並列的なものと捉えず、これらの三つの観点の必要性を、人間存在とその表現作用が有する時間的本性、すなわち、現在—過去—未来という構造に即して説明し、それらの相互連関の可能性を原理的に明らかにしていること。

(三) これらの理論にたいする様々な批判や、それらどうしの相互批判の論点を明快に整理して、個々の論点についての妥当性を公平に評価していること。

(四) とくに、ハーバーマスの言語論における意識の志向性の捨象と、フッサールにおける独我論的傾向とをともに批判するために、言語表現の意味の同一性についての間主観的な構成をめぐる、独自の認識論を展開していること。

(五) 同じく、ハーバーマスの討議倫理学を批判するために、その理論的背景をなすカントの倫理学および宗教論に遡って、その理論的限界を指摘していること。

(六) 本論文の結論となるコミュニケーション論と解釈学の相補性を強調するために、人間理性のもつ個別的経験知を普遍的知識へと転ずる働きと、言語そのものに備わっている、「地平融合」をとおして普遍的世界開示へと向かいうる能力とが、ディアロゴスの構造という点で同形性をもつことを論証していること。

本論文はこのように、言語哲学をモチーフとするロゴス論という主題にふさわしい、幅広い視野と、批判的な精神にもとづいた議論の積極的な展開、という長所をもっている。とはいえ、いくつかの点でなお不満な点もみうけられる。とくに、フッサールやカントのように、その批判において周到な文献的裏付けが要求される諸思想にかんして、その面での用意が十分であったかどうか。また、ディアロゴスの理性とパトスとの関係について、なお不分明な点が残されているのではないか。しかし、これらの問題は論者の今後の研究において追及されるべき課題とみなされるべきであり、本論文の価値を著しく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、1997年2月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。